

手漉き和紙内山紙のふるわり

大月 和彦

和室の障子を数年ぶりに張り替えた。信州の実家からもらった四十年前に製造された楮百摺の和紙内山紙は、全く変質しておらず、繊維が透かし見える白い紙は柔らかい光沢を見せていた。

内山紙は、越前や埼玉県小川町の和紙ほど知られていないが、奥信濃の飯山地方の特産品。丈夫で通気性、透光性、保温力などに優れた手漉きの和紙である。

江戸時代初期に、美濃から製法が伝えられ、農家の冬の副業として生産されてきた。

丈夫で変色しない、雪に晒すので日焼けしないなどの特色があり、障子紙の代名詞にもなつて広く使われていた。また、保存性が優れていたので筆墨紙として、官公庁でも評価され、かつては戸籍台帳の用紙としてある程度のシェアを持っていたという。

住生活の洋風化で和室のない家が増え、障子紙の需要は激減した。生産者は伝統的な紙づくりを守ろうと、絵手紙の用紙、花瓶などの敷物、切り絵や折り紙など新しい分野を拓いている。

雪に埋もれた冬に行われる紙づくりは、楮を刈り、剥いだ皮を、煮たり、叩いたり、晒したりして漉きあげる家族全員による手工業だった。

半世紀以上前に見た奥信濃の紙漉き作業や光景に思いふけた。

晩秋、畑の隅などに自生する楮を刈り取り、釜で蒸して皮を剥ぐ。剥いだ皮(黒皮)を軒下に吊して乾燥する。黒皮のざらざらした表皮を掻き取って繊維分だけの真皮にする皮かき作業。辛気臭い作業で、一家総出の夜なべ仕事だった。

雪晒しー真皮を雪の上に広げ、まばらに雪かぶせて一週間ほど晒す。この工程で自然の白が生まれるという。

真皮に混じった塵などの不純物を取り除くフシ拾い。手間のかかる作業。もっぱら女性の仕事だった。湧水の川辺に冬の間だけ設けられた小屋から女衆のお喋りや笑い声が聞こえた。

不純物が取り除かれた真皮を叩いて繊維をほぐし細くするのが、「打解」の工程。板の上に置かれた真皮のかたまりを、数人が棒状の槌で叩く。この音が夜遅くまで聞こえていた。紙漉く村の風物詩だった。